モノづくりの原点

静岡県 湖西窯跡群

窯業技術は我国で独自に発展したのではありません。五世紀頃に朝鮮半島から渡来してきた技術です。窯の形状は、山の斜面にトンネルあるいは溝を掘り、天井や壁に粘土を塗り込めて一室を造ります。そこに器を詰めて高温で焼くことにより、堅牢な水漏れの少ない器を一度に大量に作ることができるのです（イラスト参照）。

湖西市で窯業生産の行われたことを示す最古の文字史料としては、現在愛知県陶磁資料館に保管されている重要文化財指定の「陶製五輪塔」があります（写真参照）。五輪塔の地輪に「久安二年（一一四六）七月廿七日　遠海新所之立焼」とヘラ書きされています。

「遠海新所」とはかつて新所郷と呼ばれていた太田川流域を示し、今日でも太田川流域の丘陵には窯が幾つも残っています。

湖西市には、九百年から千五百年以前の古墳・奈良時代と鎌倉時代の窯跡が数多く残っている。その数およそ千基。古代・中世の湖西市は、国内屈指の大規模窯業生産地であった。まさに大臨海工業地なのである。

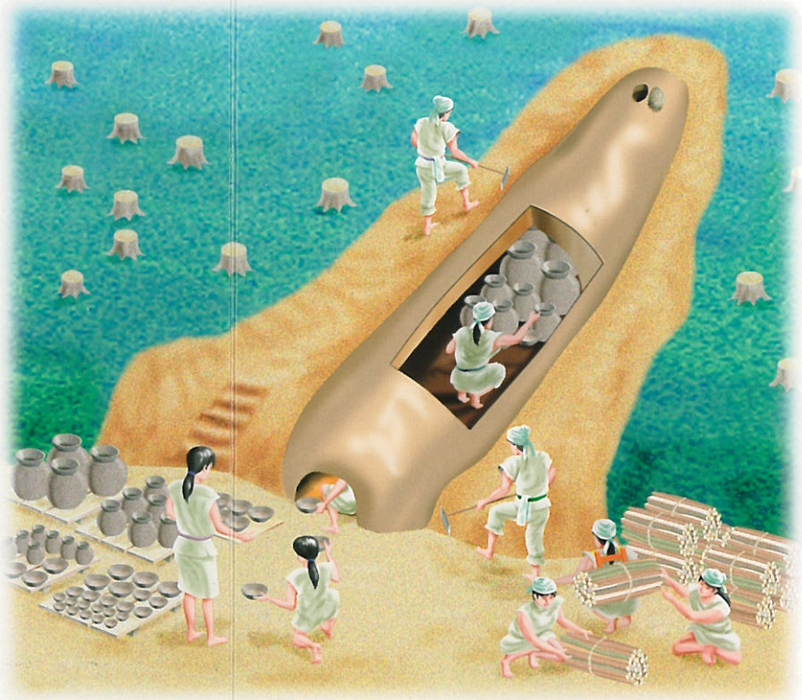
久安2年（1146）陶製五輪塔

編集・発刊

静岡県湖西市教育委員会
湖西窯跡研究会

問い合わせ先

〒431-0443
湖西市古見1046番地
生涯学習課　053･576･1140



窯場の想像復元図

湖西市の窯業生産は、さらに遡る五世紀末頃の静岡県内最古の明通り窯から開始されました。それらを「須恵器（スエキ）」と呼んでいます。須恵器の生産は、七世紀から八世紀頃が最も盛んで、部分的に階段を持つ新たな窯の創出、自然釉の美しい特産品の長頸瓶や新器種の生産が行われました。それらは静岡県をはじめ、山梨県・神奈川県・東京都・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・福島県・宮城県の遠隔地に広がり、最北端は青森県八戸市にまで達しています。湖西窯は、東日本の太平洋沿岸諸国一帯を包括する巨大流通圏を形成していたのです。

その後、平安時代には豊橋市二川に窯業地を移すものの、十二世紀頃に再び湖西で操業が開始されました。銘文を残す陶製五輪塔が造られたのもこの時期です。碗・小皿・壺・甕などの中世陶器の他に、京都仁和寺円堂院瓦や陶製五輪塔の特注品を生産しています。

十三世紀の鎌倉時代になると、同じ東海の巨大窯業地、古瀬戸窯や常滑窯との競合で碗皿の雑器主体へと移行しつつ規模を拡大するものの、十四世紀初頭には廃絶してしまいました。